ふじいでら歴史紀行 196

古市古墳群の動物を冠する古墳5 アリ山古墳

今月も動物名を冠する古墳の話をしたいと思います。それはアリ山古墳です。アリ山古墳は蟻山古墳とも記載されることがあります。

アリ山古墳は、応神天皇陵(誉田御廟山)古墳の西にある一辺45mの方墳で高さが4・5mあります。昭和36(1961)年に大阪大学の北野耕平さんによって発掘調査が実施され、墳丘の頂上で3基の施設が見つかりました。

中央の施設は残存状態が悪く、直接木棺を置き周辺に副葬品を並べたものでした。上部は削られていましたが、鉄を元として作った赤色の顔料が南北75㎝、東西50㎝の範囲でみられ、西端には水銀を元として作った赤い顔料の詰まった土師器小壺が置かれていました。調査担当者はこの部分に人体が埋葬されていたと推定しましたが、装身具の玉類が出土していないことなどから、否定的な意見もあります。副葬品はかなり乱されていましたが、やや離れた場所から鉄製の武器(剣、刀、槍、矛、鏃)、農工具(鍬、鎌、斧など)が出土しました。

南施設はさらに残存状態が悪く、薄い短冊状の鉄板が並列して15点以上出土しました。

北施設はほぼ完全に残っていました。南北1・38m、東西3・02m、深さ0・43mに掘られた床面に約5㎝の大きさの礫石を敷いて、木製の囲いを作ってその中に3層に分けて未使用の鉄製品を埋納していました。上層は約1500本の鉄鏃、中層は鉄製の武器(刀、剣、槍)、下層には鉄鏃、鉄製の農工具(斧、鎌、鍬、鋸、鑿など)が鞘や柄がついたまま埋納されていました。また、土製丸玉も埋納されていました。

調査担当者は、北施設では下層の鉄鏃や鉄製農工具等の配置がおよそ10群に分かれ、共通の品目と特異な品目が含まれることから、異なる埋納者が献上したものと想定しています。また、鉄鏃は多量に埋納されていたにもかかわらず2種類に限られたのは、鉄製品の著しい増加や生産技術の発達と製品の蓄積を表しているのであろうと発表しました。アリ山古墳は、出土した埴輪から5世紀前半に築造され、応神天皇(誉田御廟山)古墳と関連の深い古墳で、このように多量の鉄製武器が埋納されています。このことからアリ山古墳の被葬者は応神天皇陵古墳の被葬者の配下として、軍事をまとめる職掌に携わった豪族であったと思われます。

この古墳は、明治時代にはすでにアリ山古墳という名称が使われていたことが書物からわかっていますが、「蟻」の字を使った理由については謎のままです。

(文化財保護課　上田　睦)

▶アリ山古墳北施設埋納鉄製品の復元模造品(大阪府立近つ飛鳥博物館提供)